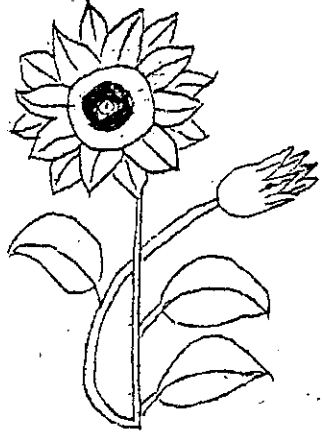


なでしこ



たのし
い
な
ら
し
よ

尋ニ
綴方



ソシテトモダチモオナイカラ
キタクナイトオモヒマス。学校
モトホイカライヤデス。

■オワカレ 内海 順子

■ウグヒス 江口 秀子

私ハミンナノオトモダチダッタノ
ガコンドワカレマス。サウスルト
一人カズガスクナクナツテサビシ
イデセウ。私ハトウキヤウニイ
ケバ、マヌアチラノ学校ニアガリマ
ス。トウキヤウハドロバツガチル
トイフカライタクノガイヤデス。

ヲトトヒ、学校カテカヘツテベン
キヤウヲシテヲリマス。トオカア
サンガ
コヒデ子サンハナレノエンガハ
ニツタエラモツテオノデナサ
イ。

トイハレマシタノデ、コハイ、ト

イツテツクエヲモツテイツヂベン
 キヤウシテヲリマス トウラノ山ニ
 ウグヒスガドコカラカトンデ来テ
 イイコエデ 「ホウホケキヨ」 ト
 ナキマシタ。 オカアサンガ、
 「ビデ子サン、ウグヒスガナイテ
 来ルヨ」
 トオツシヤイマシタノデベンキヤ
 ウラマメテ見テ来ルトイママデウ
 グヒスガウレシオウニナイテヲリ
 マシタガイツノマニカムカフノ方
 ヘトンテイツテシマヒマシタ。

■ ベンキヤウ 淡沼正夫

コンドノフネデウチノ人がトウ
 キヤウニイキマス。 私ハゴロウブト
 キヤツチミントヲカッテ乗テクレル
 ヤウニタノミマシタ。 ウチノ人がトウ
 キヤウニイッダラ一シヤウケンメイ
 ニベンキヤウシテ、ウチノ人ヲビツ
 フリサシタイトオモヒマシタ。
 私ハ一シヤウケンメイデス。 マイニチ
 ベンキヤウシテエラクナラウトオ
 モツテ来マス。
 私ハハイタイサンニオツテ、オカアサ
 シヲオドロカシタイトオモヒマス。
 (ヲハリ)



三年つばき方

平野昌代

△しほひがり、
 この間午後から私たちは先主につれ
 られてしほひがりに行きました。
 海岸にきますと、しほはあんまり引い
 ておませんでした。 すぐ水の中に
 ホマ／＼入りしました。そしてあざりを
 こがしました。けれども中々あざりが
 りませんでした。 大きい人たちはど
 ん／＼みつけておます。 私は一つで
 もい、から早くみつけた。 と思ひ
 ました。
 石の下に手を入れてみますと、大きい
 あざりがある。 たのであ。 た／＼と大
 さい聲を出して喜びました。 くれ
 のうはあとか／＼い／＼も出てく
 るのでうれしく、い／＼おちゆうで拾ひ

ました。

淡沼和子

かへお時にはみんなで十五分おりました。
 △バウクウエンシテ、
 コノアヒバウクウエンシテ、
 時ノ晩ノゴトデシタ。
 私ノ家デハ飽氣ニ黒イフクロヲカブ
 セマシタ。 スルトバウゴダンノ人が
 来テ、金四郎サンマダ大ジヤアデスヨ
 ナイレンガナツオカラカズセレバイ
 、デスヨレダヤシクハハが
 キマセンヨ。 トイヒマシタ。 オトウサ
 ンハソウデスカトイヒマシタ。
 ソレカラモナクダテ、トシト音が
 シマシタ。 和文サンア、音ハ何ダラ
 ウレトイヒマストイレハ花火タヨトオ
 シハ下ヤイマシタ。 ソレカラモ二
 三度音カシマシタ。 外ノ方がサツカ
 シクナリマシタ。 私ハ何ダラウト思

子外ヲ見マスト消ハウノ人ヲホシテ
 フオシテハトバノ方ヘカケテイキマ
 入。電氣ハウス暗クナリマシタ。シ
 イストスヘマシタガ又タラシク明ル
 リマシタ。テミンナガ一シヨニ集
 リマシタ。ザウスルト。金四郎サン
 クバニ金四郎ノ思角ニトクガカ
 ナタト電話ヲカケテク山トイヒマ
 タノテオ父サニハスグカケマシタ
 エナク電氣下ニケムリシタイナ
 ンガミエマシタ。私ハオドロイテ
 ツキヤン家ニドクガスガ入タ。目トイ
 コマサカトイヒマシタ。ソノ中
 ニホヒガシテキマシタ。ソシテコ
 ドハ目ガイタクナクテキマシタ。ホ
 トドクガスガ入テキタノテス
 ハタキハヨハクナクテ新シイ家
 へヒツコシテネテシマヒマシタ。

日の出 日本正子
 日の出 日の出 きれいな夜
 日本のお旗の 日の丸が
 あかまるよ 空たか
 てるすよ どのまでも
 日本のお旗の 日の丸は
 かなしいとなへて ながめれば
 あ日はまニヨク 笑のそら
 仔牛 横山芳文
 水神山で
 仔牛が生まれたよ
 白と黒と
 またりたよ
 つのな人がなくって
 かはいよ
 おや牛の
 おあゝのんでたよ。

四年生の綴方

おもちや箱 先生恒子
 私の箱にはおもちやかたんとはい
 つてをりませす、お人形や、あし
 おもちやがおりませす、お友だちが
 ないし私一人でお人形やま、ごち
 そびをしませす、あの日おもちや箱
 をあけて見ましたらアアアアアア
 さんおもしろい、私はおもちや箱
 て来てアアアアアアアアアアアア
 すると其のあくる日も又おもちや
 あびをしめて来ました。

西の空をさす、僕は「おみげへを取
 ておる」と言つた、廣さんは「おみ
 の海の方へ行つた、僕が取つたお
 びへは十五元した、それをお父さん
 につた、お父さんおもしろい、お
 家に持つてかへつたらお父さんか
 一月の間おびを一つ取つたらおら
 なるか知らせておるかとおつしや
 した、お父さんおもしろい、お
 におびを取つた、それからお父さん
 おびへを取ることになりませす。

こみげへ取り 浅沼厚雄

夕立

諸回

此の前の日曜日におみげへ取りにつ
 り濱に行きました、取つておる所に
 廣さんが来ました、おもちや箱を

空が曇つておもしろい、おみげへ
 取り出しますと正子におつしや
 ました、お父さんおもしろい、お

いふと気がつかつたら私が私ゝ新氣の中へ一番
 一息ひました。思はずやんも私ゝ新氣を知
 つて居るやでせうか。いつもにはあはすおと
 ぼしくて遊びに行かうとも言ひませぬぞした

●朝の光景

石津岩子

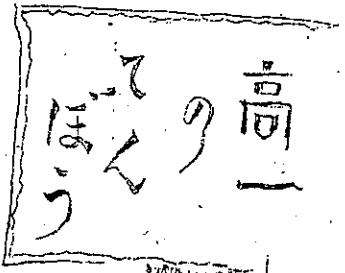
何人とも言へないよ。朝の朝に新鮮な空氣
 を吸ひ吸ひ新鮮な朝氣を吸ひ吸ひ新鮮な空氣
 各々現はれれば無邊なほどに何處かへ行つてし
 まふ顔をして家の中へ入つた。縁に腰をか
 けて一人てうおを吸つてゐると母がもう何分
 前へ行つたりと直と言つたので頭をやめて
 足ゝを直へ入らば支子か官舎あたりまで来る

お前の家へつくとお婆さんかお孫除を
 いらつせやつた。私は其の後をどうせん
 がけをどうせんや。さうせんかをいつて朝
 の朝の光景をどうせんや。よく頭に入つたよと
 春の方を見まると、太陽はもう高く上つてお

◎むづかしい綴方

お、又いやは時間か来たか。私には子人と同じ
 じやうと上手に綴方が綴れない。それでは人の日
 の日をば人やり通してゐるから。と綴方を書
 けと言つても思ふやうに書けない。お父さんは
 綴方が下手だと手紙も書けないとおつしやる。
 私は人から手紙をいたゞいても返事を返したこ
 とがない。お水もやつぱり綴方が下手だから書く
 こゝが出来ないのだと思ふ。どうにかして、うまく
 なりたいと思つてゐるけれど、ついで綴方なんか
 どうでもいゝと思つてれんしうしない。あ、綴方
 はいやなまうた。

暗さんへ手紙の言葉遣といひの妙極といひ五年
 半の時とはおぼろふんちがつて来ました。
 特上皆さんが考へが落ちついて注意深いのは
 全く嬉しく思ひます。今度は上手に書けたのが
 澤山ありませぬ。皆一生懸命だからです。こん
 ども又上手に書いて下さいね。(むづかひは)



暁の港

藤井不二雄

今朝の四時半頃、兩戸を開け
 外へ出た、未だ外はうす暗い、
 銀行の外燈はさびらき、
 ニンボリと一とて、路に光をたけ
 てゐる、空には星がキラキラと
 世界をまわらしてゐる、僕は人通り
 の少ない道を通つて、波止場に出た、
 港は人影一つない、たゞ波のサーサー
 と打ちよせる音ばかり、時々岸に
 つないでゐる小舟のゆれる音がする、沖の捕鯨船の人達は、もう起きたのであつた、甲板
 の上を往き來してゐるのが見える、山々はまだ眠つてゐる、あさひ山は、がっかり
 として、峰は雲におぼはれて、一入雄太を感ずる、村々では、雞の声かする、東の空
 は、ホッポノと明けをめてくる、實に僅かな時である、我が家にもう起きたのである、
 うー。思ふて、歸途に、あたりでは、みんな仕事に取りか、つてゐた。をばり
 (暁の光景がよく現れて居る、此の光景に、何を得る所なければならぬ)

校東角男

僕は将来海軍に志願する希望を持つてゐる、僕は今年満十才、十才で志願する
 つもりであるから、身体を大切に、海兵団に入り一心に勉強して、進級したならば
 海軍兵學校の試験を受ける考である、此の島に居た川島辰夫さんは海軍兵學校
 へ入つて居ます、僕も勉強したら、試験が受かりぬことはたいと思ひ、そして其の上は大學

の試験も受けて、将来の將校を希望するものである、をばり

（意気頗る壯である男子二度志を立てたならばウンと勉強し決して中途で挫折せはたからぬ必ずマリ通せ男の志思地るやれ）

綴方方の時間よ

佐々 木一馬

カンカン〜と始業の鐘がなつた、僕の胸には不安の雲がみなぎつた、何故であらうか、それは綴方方の時間で、あつたからである、何も綴方方の時間だといつても心配する必要はない、は皆人とは思ふであらうが僕はかんじんの題が考へてなかつたからである、教室に入つてからマア何か考へ出せるであらうと思つて居つたがトウ考へ出せないので、時間はこ〜とせまる、いよくせつぱつまつて此の題をかいたのである、をばり

（此れが當意即妙の綴方かた上出来た三読四読して此の味を忘れらな）

感トたまよまを

金一馬小〜ま

最近飼つた家のチヤボがヒヨコをかつした、小さいので大へん可愛、日一日と大きくなるのを待つてみた、ある日のことであつた、今日日は出船なので、家は忙しくゴタ〜としてゐた、父が植木の荷造りをして居て、不意にゴアア〜めあいそうよと云はれたので、私は水を汲んで居た手を止めて、父のゴアア〜を見るとき、何とかがあつたことではありませんか、父がひよこを間違つて踏みこころしたので、ひよこも可愛をうで、人が老眼の父のしたこと、も気の毒です、私は親鳥が来ない中にも思つてひよこの仕末をした、もし親鳥がそばにゐたらとつてあつたでせう、其の時親鳥が他の方でひよこをよぶ声がしまゝした、死んだ子を探してゐるのです、可愛想でなげませんでした、其の時私の胸に雑でさいアノ通り親が子を思つてゐる、私たちの親は尚さら

のことであつた、それだのに、私達は思つてゐたらば親は必うであらう、こう考へると深い母の恩、親の恩を思つて一心に勉強して、此の恩におくひを付けばなかりませんと、をばり

（よく氣が付いた、兄てがそこである父母の恩愛に報ゆるが孝の第一歩だ）

大村校に入學して

岩本千代子

私は四月八日此の大村學子校に入學した、仕度して學子校にくる時はとてもはががしかつた、それ、扇浦の生徒が大村の生徒は、いぢわるだと云つたので入學がいやに思はれた、片川共入學して、初めから入學すれば、よかつたと思つた、私は今迄の學子校では、ずいぶんいぢめられた、けれど、此のしんせうな入學したの、入學したからには、一心勉強して、よい成績をとりたいと思ふ、をばり

（自分の悪いことを悪いと云ふ人は少ない、自分が悪いから人を悪く云ふので、善い人は人を悪くは云はないものだ、ここが心すべきところだ）

尊い人

横 尾 梢

それは或、寒い夕方のことであつた、一人の労働風の男が大通りを歩いて行く、そこへ横町から又一人の年とつた労働者が出て来た、何れも何処かへ働いての、かへりと思はれる、印半天を差して片手に辨當箱を下げてゐる、その人はお互に知り合はらうか、と、年寄りの声がかへりか、すいぶん違ひない、ア、おそい、でもマア儲ければよい、さしかし、労働者もつらい、も人だ、な、だが、上

て来られた。私が思っていた通り先生は紙を出して本をさがさせた。私が何をやるかと思つてびくびくしていたら先生がかなつけどと言つて黒板にはじめた。それを見れば始めのたぬきは書いてから一ぺん見れば書いて後の方を見れば書いて鉛筆を置いていゝる者もある。頭をひねつてか人がへていゝ人もいた。いろいろな風をしていゝた。先生が後の人集めろと言つてあつて行つてから後の人にさいて見たら一つだかちかつていゝかひやうで一人でぼんぼんだ。
僕の家は昨年猫を人にもらった。猫の名は「レ」をつけた。とてもかひよく美しい。男猫で早にやわめ程をなくして顔にさゝる出ないから勿論そとにはいゝていゝ出ない。だからレの美しいのかわかつた。だけれど弱いのには心配です。いつも猫気なほども食べべつ身といつたらさぞうかたなますは、やまだ「レ」でも言ひまじうかたなますは、やまだ

たしと人有りませ。此の猫はせつと人間のなりかわけだらうと思ひます。レは問かめれば自今の際を一生懸命にためてゐる。人とおしやれでしよう。これを見て一瞬はおしやれの猫と言つて腹をかへて笑ひました。僕もいつしよに笑つた。
今朝 高二 笹本賞代子
今朝四時半にかきて外へ出た。えしたら徳松さんが曾代さんをかきたの。さうして私はわげづらをして「レ」といふた。私は顔を見れば頭をすいてお木から御飯をたいていゝるとほうほうの鳥か「レ」になりた。まだ私があそびたときほうほうの鳥か「レ」う明ろくかつた。茂ちゃんも曾代ちゃんも早い。さういつた。私は「レ」を今日は早かつた。止とれもいつた。茂ちゃんはおたのこの頃おぼろしてはかりいゝ。さういふつておれた。さう見ると茂ちゃんもさういふ人夫とみちやんもわていた。私はとみちやんをさういふ顔を見せながら私は御飯をたべて學校へいゝ。たしとみちやんはわがさうな顔してやつてきた。

青女綴方

正座 一年 鴉飼 愛子

専修女學校は小學校と異つて裁縫が主で読方算術書方算は一週二三時間位づゝである。毎日四時間位づゝ座つてゐるのがつら。さういふわけ書方の時間が一番つらい。入學當時は何度すけりなほした事か。暖い日ほど足の打目から汗かにドみ出したりす。夏にでもなつたらだるくはあつたらさうす。たらうと考へる。正座のつらさといふことがほんとうにあつた。
△正座は馴れれば決つたつらさのものではない。始めはです。

夕暮 一年 菊池 初枝

西の空は眞赤に夕焼がしてわら。ハラハラ散つた落葉も掃かれ、歩道にも夕方が感ぜられる。白い煙が人家の屋根かおすつと上つて行く。
表道と背にいでみ捨てた防風林に向つた。抜けて夕焼にまろりと輝く海面を見つめてゐると何事かおにさ、やうに感ぜれる。この度り湯内には今日は一隻のカヌーの影も見えない。空の夕明ら輝きも「レ」と輝き三つ豆の間にさへさうれた部分から暗くすつて行く。おんだか今夜は雨が降りさうだ。大急ぎで家へ向つた。往來者が来るともう道には電燈の光が流れておた。

學級	編制	男	女	計	教員
第一學級	尋常科第一學年	三九	三二	七一	菊池久子
第二學級	尋常科第二學年	二四	二八	五二	永田希祝
第三學級	尋常科第三學年	二一	二七	四八	橫山芳枝
第四學級	尋常科第四學年	三六	二五	六一	橫山文雄
第五學級	尋常科第五學年	二三	三〇	五三	東晃
第六學級	尋常科第六學年	二三	三二	五五	藤川敏夫
第七學級	高等科第一學年	二一	二三	四四	水野市五郎
第八學級	高等科第二學年	二五	一九	四四	上野茂
計		二二二	二六六	四八八	伊藤しず江
弟島分校	尋常科	〇	一	一	

大村町立小學校並弟島分校昭和三年度

學校日誌より

- 三月二十日 午後送別野球試合
- 三月二十五日 午前九時ヨリ修卒業證書授與式
- 三月二十八日 弟島へ謝恩潮干
- 四月一日 午前八時始業式 受持発表
- 四月六日 午後一時入學式
- 午後一時「驅逐艦」夕霧入港 海軍特命檢閲使來島
- 尋二以上 波止場に出迎
- 四月十九日 授業第三時限後 汐干狩 尋四半 西町海岸 尋五以上 宮浜

御寄贈

- 四月一日 鵜飼愛子嬢ヨリなでしこへ 参
- 原田武重殿 ヨリなでしこへ 五月也
- 内海幸子順子兩嬢ヨリ保護者會基金へ 拾円也
- 四月二十四日

昭和十年四月第一五六号

七

大村



大村

大村